

はじめに：結合価の変更に対する通言語的アプローチ

呉 人 徳 司

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

Introduction: Cross-Linguistic Approach to Valency-Changing Processes

KUREBITO, Tokusu

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

この特集では、Valency-Changing Processes, つまり動詞がとりうる項(argument)の変更にかかわるプロセスを通言語的に検討する。具体的には、以下のようなプロセスを対象とする。

1. 自動詞と他動詞の関係
2. 受動化(passivization)
3. 使役化(causativization)
4. 逆受動化(antipassivization), 逆使役化(anticausativization)
5. 適用(動詞)化(applicativization)

この特集は、全部で6つの論文から構成されている。まず、アフリカの言語として、系統が異なる2つの言語、ひとつは、アフリカ大陸赤道以南で広く話されているバントゥ諸語の一つであるヘレロ語、もうひとつはナイル諸語の一つであるクマム語を扱った論文を、加えて、オーストロネシア語族の言語としてインドネシアのスンバワ島西部で話されているスンバワ語の論文と、ユーラシア大陸の言語としてロシア連邦のダゲスタン共和国およびアゼルバイジャン共和国で話されているコーカサス諸語の一つであるアバール語、同じくロシア連邦のシベリア地域で話されるチュクチ・カムチャッカ語族に属するチュクチ語、また、ツングース諸語の一つであるナーナイ語を扱った論文を収録している。以下では、これら6つの論文の内容について簡単に概略を述べる。

米田信子「ヘレロ語における適用形構文と目的語の対称性」は、バントゥ諸語に共通して見られる「適用形」*applicative* を扱い、適用形動詞と目的語の対称性に関して論じている。適用形は、動詞の派生形の1つで、名詞項を一つ増やすという結合価の変化を引き起こす。米田はこの新たに加えられる項を「適用目的語」

と呼び、派生接辞が付く前の元の形が取る目的語（「直接目的語」）と区別している。バントゥ諸語の中には、これら 2 つの目的語のいずれもが「第一目的語 (primary object)」の資格を持つ言語（目的語が「対称性」を持つ言語）と、どちらか一方しかその資格を持たない言語（「対称性」を持たない言語）がある。米田はこの論文の中で、ヘレロ語が前者に属することを明らかにするため、適用形構文における各目的語の振る舞いについて概観し、第一目的語の資格がどのように与えられているのか、そこへのアニメシー属性の関与に触れながら論じている。

稗田乃「クマム語の中動相」は、クマム語の中動相の意味がどのように決定されるかを動詞がもつ本来の意味と文の構造の関係から論じている。クマム語にはバントゥ諸語のように、動詞の結合価を増やす「適用形」（稗田は「適合形」と呼んでいる）のようなものもなければ、結合価を減らす「受動化」も存在しない。クマム語の中動相の形式は、他動詞語幹に中動相をつくる接尾辞 *-ere* が付加されて形成される。ただし、すべての他動詞が中動相の形式をもつわけではなく、動詞の意味により中動相形を作ることができたり、できなかったりする。自動詞と動詞中動相形は、動詞がとる項の数に関して同じ振る舞いをするが、意味的には自動詞文と中動相文は、明確な違いが存在する。自動詞文は、自然発生的な出来事 *spontaneous events* を表現するが、行為者 *agent* の存在を含意しない。一方、中動相文は不特定な行為者によって引き起こされた出来事の状態 *states of events* を表現し、行為者の存在が含意される。その結果として、中動相文は語用論的には受動文と等価の文として機能する。稗田はまた、クマム語の中動相文を、対応する他動詞文との関係から 2 つに分類し、2 つのグループの中動相文の意味的な特徴、違いを詳しく説明している。すなわち、中動相文の主語が対応する他動詞文の目的語に対応するグループと、中動相文の主語が対応する他動詞文の主語に対応するグループである。ただし、動詞によっては、1 つの中動相形が両方のグループに属する場合もある。

塩原朝子「スンバワ語の減項にかかわる接頭辞 *N-* と *bar-*」では、スンバワ語の動詞の結合価の変更に関わるプロセスのうち、接辞 *N-* と *bar-* が関与する「自動詞化」に伴う減項について論じている。この 2 つの接頭辞は「減項」にかかわらない機能（拘束語根 *bound morpheme* に付接し、自動詞を派生する機能）も持っている。動詞の結合価の減項に関する機能についていえば、*N-* と *bar-* はすべての他動詞語基に付接するわけではなく、どの他動詞語基にどちらの接頭辞が付接可能かについて、語基の音声的、意味的な特徴から説明することは難しい。また、それぞれの接頭辞によって派生される語と語基の他動詞との意味的・統語的対応には複数のパターンがあるが、どのパターンを取るかは個々の語基によって決まっており、こちらも予測は難しい。塩原は、語基と派生形の自動詞の対応について「減項」の対象となる要素の種類に着目し、(1) *P* が減項の対象となるタイプ、(2) *A* が減項の対象となるタイプ、(3) その他のタイプ（減項の対象が明確ではないタイプ）

と3種類に分類し、自らの調査データから多くの例を取り上げ、詳しく説明している。

山田久就「アバール語における動詞の結合価」は動詞の結合価と格枠組みを扱っており、それに基づいて、アバール語の動詞を一項自動詞、二項他動詞、二項自動詞、二項動詞である斜格動詞、三項他動詞と、5つの主要なタイプに分類している。つまり、第一のタイプは *xweze* 「死ぬ」のような一項自動詞であり、第二のタイプは *gukkize* 「だます」のような二項他動詞で、大多数の動詞はこの2つのタイプに属する。さらに、第三の動詞のタイプとして、*bozhize* 「信じる」のように、1つの項を絶対格で標示し、もう1つの項を何らかの斜格で標示する「二項自動詞」を、第四の動詞のタイプとして、*l'aze* 「知る、知っている」や *AM=ok'ize* 「好く、好いている、欲する」のように、経験者あるいはそれに類する意味役割を表す要素が斜格で現れ、もう1つの項が絶対格で現れる二項動詞を挙げている。第五の動詞のタイプは *k'eze* 「あげる、渡す」のような三項他動詞である。アバール語の三項動詞の3つの項は能格、絶対格および何らかの斜格で標示される。

アバール語には、自動詞としても他動詞としても使われるいわゆる両様動詞 *double-sited verb* も認められる。アバール語には受動態も逆受動態もないが、逆受動態的な振る舞いを持ったものに基本となる動詞から派生する持続動詞と呼ばれる一連の動詞がある。また、アバール語には、一般的な使役動詞の *g'a=AM=ize*、強制使役の *t'amize*、許容使役の *teze* および *AM=ichchaze* があるが、これらは動詞の不定形を使役動詞に埋め込む形で表現される。

呉人徳司「チュクチ語の結合価の変更について」では、動詞の他動性の変化（いわゆる自・他の交替）、使役化、逆受動化、逆使役化などのプロセスが動詞の結合価、つまり動詞がとりうる名詞項の増減にどのように関わるかについて論じている。これらのプロセスは、すべて動詞語幹または形容詞語幹に接辞を付加することによって実現する。また、接辞の付加ではないが、名詞項の減少という点では、名詞抱合もこのプロセスの1つであると考えられることができる。

チュクチでは、使役が非常に発達している。動詞語幹に1種類の接辞がつく「単純使役」、2種類の接辞がつく「二重使役」がある。また、使役接辞の種類により、被動者の意志を尊重する意味合いをもつ場合と、意志を無視した「強制」の意味合いをもつという違いが生じることがある。

風間伸次郎「ナーナイ語の非人称形動詞について」では、ナーナイ語における主語の人称接辞をとらない非人称形動詞について論じ、次の2点を主張している：

- (1) 非人称形動詞は、発話や思考の動詞が支配する名詞項として多く用いられる。
- (2) 非人称形動詞は、意味的にはヴォイス的な性格も示すものの、統語論的には、格枠組みの変化等を引き起こさないようである。むしろ主節の動詞の示す時点や発話の時点に対する「相対テンス」としての性格を強く示す。

通言語的に「非人称動詞」と呼ばれるものの多くは *impersonal passive* とも呼ばれ、動詞の結合価の減少を伴うという点で、態となんらかの関係をもつ。ナーナ

イ語の非人称形動詞はそのような特徴は示さず、多くの言語に見られる *impersonal passive* とかなり異なるものである。

全体的に言えば、この「特集」に盛り込まれた 6 つの論文は、動詞の結合価の変更に焦点を当て、筆者各自が現地調査で得た一次資料に基づいた記述研究であり、それぞれが興味深い内容になっていると言えよう。

なお、この「特集」は、2005 年 4 月から 3 年間にわたって行なわれた、アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「形態・統語分析における *ambiguity* (曖昧性) — 通言語的アプローチ —」の成果の一部であることをここで明記しておく。